

聴覚障害学生への情報保障支援を担う学生のメンタルヘルス不調に影響する要因

—自己イメージの良さと社会的スキルの高さとの関連から—

○磯田恭子

橋本佐由理

(筑波技術大学、筑波大学大学院人間総合科学研究科) (筑波大学体育系)

KEY WORDS: 聴覚障害学生支援、メンタルヘルス、自己イメージ

(目的) 2006年12月に国連で採択された「障害者の権利に関する条約」は各国の障害者権利向上への取り組みを進める契機となり、わが国においても「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が制定されるなど、障害者が障害のない人と社会的に完全かつ平等に参加できる社会の実現に向けた取り組みが進められている。

この中で、高等教育機関にて学ぶ聴覚障害学生に対しては、健聴学生と同量・同質の情報が取得できるように音声情報を文字などの視覚情報に変換し伝える「情報保障支援」を提供している例が多い。日本学生支援機構(2016)によると、支援実施大学の約9割が同じ大学に在籍する学生(以下、支援学生)が担い手である、いわばピアサポートによる支援実施となっている。支援学生への課題として、人材不足(杉中ら,2015)、過度な負担への対応(田中ら,2008)、量と質の確保や学内への理解啓発(菊池ら,2013)などが指摘されているが、彼らのメンタルヘルス実態については検討されていない。

また、大学生はアイデンティティの確立の時期であり(三宅ら,2015)、多くの心理社会的ストレスにさらされ(佐藤ら,2010)、対人接触をストレスと感じる者が増加している(橋本,2000)等の指摘がされている。その対応として、健全な自己イメージをもつこと(大石,2013)、自己価値感や問題解決度を高め、自己抑制度の低下を図ること(上田ら,2012)、他者依存性の低下(福岡,2015)などが求められている。こうした対人依存心や自己抑制心の強さは、他者報酬追及型のものごとの判断基準で行動している可能性を示し、自己コントロール力を失い、ストレスを抱えやすくなる(橋本ら,2009)とも言われている。そして、社会的スキルは、精神健康を良好な状態に保つ、または移行させる可能性がある(緒方ら,2010)ことが指摘されている。

これらをふまえ、本研究では聴覚障害学生への情報保障支援を担う学生のメンタルヘルス不調に影響する要因について、自己イメージの良さや社会的スキルの高さとの関連から検討することを目的とする。

(方法) 全国の4年制大学のうち聴覚障害学生が現在在籍し、何らかの情報保障支援を提供している大学10校に協力を依頼し、支援学生を対象とした無記名自記式質問紙調査を実施した。調査期間は平成28年4月～5月である。

調査票は、メンタルヘルスを測定する2尺度(日本版GHQ精神健康調査票12項目版(GHQ12:①)、自己評価式抑うつ尺度(SDS:②))、自己イメージを測定する3尺度(日本語版Rosenberg自己価値感尺度(自己価値感:③)、自己抑制型行動特性尺度(自己抑制度:④)、対人依存型行動特性尺度(対人依存度:⑤))、および社会的スキルを測定する1尺度(KiSS-18:⑥、下位因子6項目)により構成した。

統計解析にはIBM SPSS statistic ver.22およびAmos ver.22を使用し、統計学的有意水準は5%とした。本研究は筑波大学体育系研究倫理委員会の承認を受けて実施し、研究概要を説明した後、同意を得た者を対象とした。

(結果)

1. 一般大学生との得点の比較

分析対象者は123名(平均年齢20.67±1.48歳、男性36名、女性85名、性別不明2名)であった。本対象者と一般大学生を対象とした先行研究(仙波ら,2011¹⁾、武田ら,2012²⁾、上田ら,2012³⁾、北見ら,2010⁴⁾)の得点を比較したところ、支援学生のメンタルヘルス得点の高さと自己抑制度の高さに有意な得点差が認められた(表1)。

表1 先行研究との平均値の比較

測定項目	本対象者 Mean±SD	先行研究 Mean±SD	t	p	
①	4.87±3.09	3.43±2.75	5.166	**	1)
②	43.86±7.82	42.15±8.55	2.427	*	2)
③	4.86±2.63	5.07±2.28	-0.866	n. s.	3)
④	11.10±3.52	10.07±3.48	3.234	**	2)
⑤	7.37±3.17	7.70±3.23	-1.170	n. s.	2)
⑥	57.36±11.63	57.31±10.93	.046	n. s.	4)

** p<.01, * p<.05, n. s. p>.10

2. 支援学生の自己イメージや社会的スキルがメンタルヘルスに与える影響

橋本ら(2006)の先行研究をもとに、支援学生の自己イメージの良さと社会的スキルの高さが、メンタルヘルス不調に与える影響についての仮説モデルを構築し、検討を行った。共分散構造分析モデルの適合度は、 χ^2 値=56.825、 p =.025、GFI=.923、AGFI=.866、RMSEA=.064であった。今回の分析対象である全標本(N=123)について、構築した仮説モデルにより検討した。その結果、「自己価値感」「対人依存」「自己抑制」の観測変数からなる潜在変数「自己イメージの良さ」は、観測変数「GHQ12」「SDS」からなる潜在変数「メンタルヘルス不調」(β =-.748, p <.001)に強い負の影響を与えていた。KiSS-18の下位因子である6つの観測変数「初歩的スキル」「高度なスキル」「感情処理のスキル」「攻撃に代わるスキル」「ストレスを処理するスキル」「計画のスキル」からなる潜在変数「社会的スキルの高さ」から、潜在変数「メンタルヘルス不調」(γ =.024, p =.781)への影響は認められなかった。また、潜在変数「社会的スキルの高さ」から潜在変数「自己イメージの良さ」への影響(γ =.510, p <.001)が有意であり、正の関連が認められた。

(考察) 支援学生のメンタルヘルスは一般学生と比して不良であり、自己抑制度の高さが特徴的であった。仮説モデルの検証の結果、良好な因果関係モデルを得た。支援学生のメンタルヘルスは良好な自己イメージから強い影響を受け、社会的スキルは自己イメージを介して間接的にメンタルヘルスに影響すること(橋本ら,2006)が明らかとなった。このことから、支援スキル等の技術的な側面のみならず、学生自身の自己イメージを良好にするサポートにより、支援学生のメンタルヘルス不調を防ぐことができる可能性があると考えられた。

(ISODA Kyoko, HASHIMOTO Sayuri)